

# 森田節

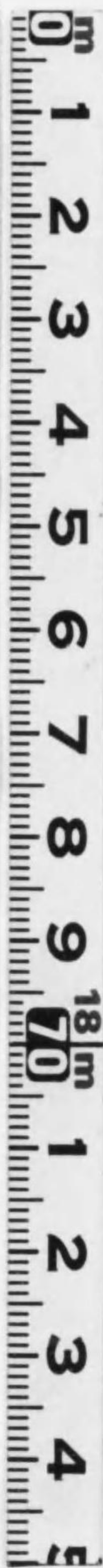
勤皇護國烈士並先覺者顯彰叢書第二編



大政翼贊會和歌山縣支部編

特 250

704



# 始



特 25)  
70)

和歌山縣勤皇護國烈士並に先覺者顯彰叢書第二輯

森  
田  
節  
齋  
翁

大政翼賛會和歌山縣支部



## 序

今や戦局は日を逐うて苛烈を加へ、決戦の様相は愈々深刻化しつゝあるの時、一億國民は今こそ我等が父祖に承け繼いだ純忠の至誠を以てこの曠古未曾有の國難を克服せねばならない。而して戦勝の要訣は種々あるであらうが就中國民の士氣を昂揚し、大御心を體して一億鐵石の團結の下にそれらその本分に最善を盡す事が一切の根柢である、之れ大政翼賛會が曩に勤皇護國の烈士並に先覺者顯彰運動を興しこの國家非常の際に當り郷土の先賢を偲び國民の士氣を昂揚し戦場の將兵と同じ精神を以て戦ふ力の増強に資せんとする所以である。大政翼賛會本縣支部に於ては之が顯彰運動として我が郷土の大先輩の遺勳に關し之が研究家に委嘱して一般に對する講演を煩はし尙遺墨、遺品の展觀を併せ行ひ更に縣下の青少年層を對象としたる冊子の刊行を計畫し漸く之が實現の運びとなり喜多村進氏の執筆による森田節齋翁を發刊することとなつ

た。言ふまでもなく執筆者が顯彰運動の眞精神をよく理解せられ、造詣深き研究と相俟つてこの程度のさゝやかなる刊行物としてその目的を盡し得たるものと謂はねばならぬ。殊に行文平易、よく樞要を衝き、青少年の心魂に迫るものあるを信じて疑はないのである。

冀はくは縣下青少年諸君は固より縣民各位は我等が紀州にその足跡を留むる森田節齋翁の遺徳を仰ぎ、その心を心として今日の時局に對する不動の信念を練り、精忠敢闘至誠の限りを盡して先賢に應へ、大東亞戰爭を完遂して世界の新秩序を建設し、以て宸襟を安んじ奉らんことを。

昭和十八年九月十八日

大政翼賛會和歌山縣支部

事務局長

坪

野

賢

三

森田節齋翁

目次

はじめに	七
一、尊皇思想の種子	一〇
二、文名大に揚る	一七
三、節齋先生と吉田松陰	二三
四、無絃女史	三一
五、倉敷時代	三五
六、小楠公髻塚碑文	四三
七、龍門山麓を墳墓の地とす	四六

## はじめに

大事業を完遂するためには不斷の情熱と力とが要求されるものである。その情熱と力とは青年層に與へられた特權である。言ふならば青年にして、若しも情熱を持たず、力がないといふならば、形はたとへ青年たりとも、青年としての活力は死に當るべきである。左程にも、私は青年に向つて、情熱を持ち、力の漲ることを望まずにはゐられない。

我が尊い國史を回顧してみてもいい。日本武尊は御齡十六にして熊襲を平服せしめ、進んで東國に向つて平定の劍を揮はれた。即ち御青年期の御事業である。大化の改新を斷行された中大兄皇子も尙ほ二十を過ぎたばかりの御齡であらせられ、之を輔佐し奉つた藤原鎌足も尙皇子と同じ青年であつた。又蒙古來寇の際、之を筑紫の海に撃破

し、生き残る者僅か三名といふ勝利を擧げた、北條時宗も尙ほ二十代の若さであつた。否我が史上かうした國家的事業を完遂するに當り、顯著なる大人物のみを擧げようとはすまい。かの明治維新の大業を果されたのは、天皇の御稜威のしからしむるところとは言へ、その第一線に於て活躍し、倒幕と共に建設の道に進んだ者即ち志士烈士と稱せらるゝ者の大多數は、實に青年の群であつたことを肝に銘じてもらひたい。それはまことに青年の純なる情熱と力との賜物からである。

之を以つて言ふならば、青年の志操が堅實であり、力に溢れて居るならば、その時代の國家は繁榮し、之に反して、若し青年の氣力が弛緩ちかんしてゐるならば、その時代の國家は衰亡に傾くと言つて差支へがない。

世に青年は次の時代の擔當者だといふ。言ふまでもないことであるが、實は明日の時代の擔當者であると共に、今日の實際の働き手、活躍者でもある。今日必勝の戦時下に於て、南に北に戦ふ皇軍を思ひ、同じく銃後の生産面を窺ふ時、私共は青年達の

活躍を如實に觀し得るのである。

斯くの如く青年は國家發展の上に、まことに重大なる使命を帯びると共に、その實踐者として大きな役を振り當てられてゐるのである。

しかしながら、青年の情熱は純であり、力満ちあふれてゐるとはいへ、之を放任して、彼等が行くまゝにしておいては、兎もすると、常軌を逸して、思はざる方向に奔るおそれがないとはいへない。ここに必要なるは、正しき指導者である。指導者さへ正しき認識を以て事に當り、その進むべき方向を示し、之を教導するならば、青年はその指導者の示唆により、指導者の意圖のまゝ動く筈である。

明治維新の際に於て、平田篤胤も、吉田松陰もその指導者の一人であつたに違ひがない。特に森田節齋先生は、實行派の指導者として、最も偉大なる存在であつたことを茲に銘記する。

森田節齋先生が實行派の指導者として、よく當時の青年層に向つて、國體の明徴を

一〇  
説き、勤皇思想を鼓吹して國論を高め、遂に天誅組をして討幕の烽火を擧げしめた隠れた指導者として大に顯彰せねばならぬ儒者である。それにも拘らず、世人の多くは、吉田松陰の師であつたことすらも知らない。私共は今少し節齋先生のことを知る必要がある。殊に我が和歌山縣人としては、先生の墳墓が現に那賀郡龍門村に在り、その晩年を過ぎられた先生潜居の家、そして終焉の家までも、尙ほ遺されてゐる以上、大なる關心を以て先生のことを知らなければならぬ筈である。特に縣下の青少年達は是非一度は、その墓碑のまへに額づき一本の香華を捧げて先生の冥福を祈るべきである。

### 一、尊皇思想の種子

節齋先生の父は森田文庵といひ、五條の町醫者であつた。母は千代、異母兄にして父の業を嗣いだ文作といふ兄があり、長じて後やはり醫師になつた仁庵、儒者になつ

た月瀬といふ二人の弟があつた。

少年時代の節齋先生は、必しも傑出した事蹟を遺してゐない。平凡な少年といふよりも何事にもこだはらない、無頓着な子供であつた。草履の鼻緒が切れてゐても平氣であれば、羽織の紐が一本であつても氣にしないやうな性質であつた。躰軀は大きく、骨組ががっしりとしてゐるのが目立つ位であつた。

先生十一歳の秋、父文庵は病のために逝き、それからは賢母千代女の手によつて四人の兄弟は養育された。父の文庵は、醫は濟生救民にあるといふ信條によつて、特に貧しき者の醫療に力を注いだ位の人故、家には貨殖なく、主人に逝かれたあとは、決して豊かな生活は出来なかつた。千代女は助産婦ともなり、暇を見ては賃仕事にも餘念なく、しかも四人の男の子を抱えて忍苦の日を送らねばならなかつた。

文政八年二月、大和五條の里はまだ春が淺かつた。南朝の遺蹟賀名生の溪では梅が漸く咲き初めた頃である。



時に節齋先生は十五歳、兄の文作は十九歳の青年として育つてゐた。

二人に甲斐々々しく旅装せしめた母の千代女は、五條極樂寺の文庵の墓前に連れてゆき、新らしい香華を捧げた後で、物靜かに、しかし改まつた態度で二人の子に言ひ諭すのであつた。

「今日はいよくあなたたちは學問をするため京へ旅立ちをする日です。それに就て之は私が言ふのではない、亡くなつたお父さまのお言葉として、よく聞き入れてもらひたい。それは、長男の文作は醫者になつて、森田家のあとをつぎ、次男の謙藏は何んでもいゝ日本一の人物と仰がれる者になれといふことです。これはお父さまが平素から言はれて居つたことですから、必ずこのお言葉を忘れないで、しつかり學問をして來て下さいよ」

二人の兄弟は眉に決意を示して、母の言葉をしつかりと胸に聽いた。

「お母さま、私たちは今のお言葉を決して忘れず、十分に學問をして參ります。お母

さまには心配をかけるやうなことは致しません」

文作の言葉を、母も亦うなづきながら聽いた。

「文作の今の言葉で、私も安心して京へ出すことが出來ます。京は何と言つても都のこと、五條のやうな田舎とは違ひ目移りしやすい物が多いことだから、そんなものを目を奪はれることなく、しつかりと勵んで下さい。母はあとに残つた二人の弟達を育てながら、あなた達の成人を祈つて居ります」

亡父の墓前で誓を立てた文作及び謙藏即ち節齋先生は草鞋の足も軽く故郷五條を旅立つて行つた。

草鞋をぬいだ家は、當時天下切つての高儒と言はれる、猪飼敬所の門であつた。即ち當時の儒者仲間といふものは、江戸、京都、浪華とそれ／＼塾を開いてゐたが、多くは見臺を叩いての口辯はうまくとも、讀書沈思聖賢の道を履む者といへば數ふる程であつた。儒者の看板を出して、生活の糧としてゐる者が多かつたのだ。さういふ腐

儒の中にあつて、敬所は斷然頭角を抜いてゐた。敬所の行状は従つてまことに正しいものであつた。その上にもこの儒者の偉とする所は、他の儒者と異り、我國體に就てまことに明瞭なる見解を持つてゐたことである。節齋先生が、その少年時代から、この大儒者に従ひ、その人格と見識に感化を受けたことは、言ふまでもないことである。

それから節齋先生は文章を頼山陽らいさんように就いて學んだ。まだ二十歳前にして大に山陽に賞讃される程の文章家であつた。後年文章報國に挺身する土臺が、かうして築かれたのは事實である。しかし山陽から受けた最も大きな影響は、何と言つても山陽の抱持してゐた尊皇思想と、溢るゝばかりの情熱であつた。かうして純情なる年少の節齋先生は、一方に於て高儒猪狩敬所から經書を學ぶ傍ら、その人格的氣概に接しつゝ、我邦國體の尊嚴を醇々と教へられ、他方に於ては山陽の鋭い氣象を通して、國體の精華を讀へられたのである。

即ちこれらの指導者を得て、後年の勤皇儒者としての第一歩はここに種蒔かれたのである。

十九歳になつた時、江戸に下り、とにかくその頃の學問の中樞であつた昌平校に學ぼうと思つた。その時敬所の諭した言葉は次のやうである。

「江戸は方々から儒生の集つてゐる所だ。従つて學問も繁榮してゐることと思ふ。しかし大義明分を忘れず、國體の尊重すべきことを、必ず忘れてはならないぞ」

節齋先生はこの師の言葉を胸に納めて、東海道を下つて行つた。

昌平校は言ふまでもなく、當時としては最高學府であり、三百大名の藩から選ばれた學生が參集して、學問の道にいそしんでゐる所である。天下の儒者を心がけてゐる節齋先生にしてみれば、何は兎もあれ、その學校に學んでみたい氣が起らずにはゐられなかつたのである。

昌平校に来て書生寮に入つたものゝ、時勢は文政の末期、氣風糜爛ひらんし、頽廢たいはい的な空氣が充滿してゐる頃で、従つて寮の氣風も、先生の粗野な様相さまさうとは凡そかけ離れてゐる。

たし、又江戸それ自身の空氣も、ひたりと先生の胸には落ちつかなかつた。僅に安井息軒、鹽谷岩蔭の朋輩が出来た位であつた。そして時に京都を思ひ五條のことが思ひ出される時、先生は絶えず肌身離さず持つてゐた、彼の慈母千代女から寄越した手紙をひそかに取り出して、目のあたり物言ふごとく手紙を通して母と相語るのであつた。性行粗野にして、無頓着の所があつたが、しかし母に仕へる孝心は深かつた。

或日のこと、節齋先生は便々と大きな腹を出して午睡をしてゐたことがある。一人の書生はその腹に「唐宋八大家」といふ悪戯がきをした。それは節齋先生、當時八大家のごとき文章家を氣取つてゐたし、事實亦、さすがに山陽の教を受けただけに、昌平校切つての文章家であつた。

天保四年、たま／＼亡父文庵の十三回忌に際し、節齋先生は、一先づ昌平校を辭して、大和五條の生家にかへつて來た。その時舊師敬所を通して、日野西齋愛卿に碑文を依頼し、それを刻して亡父の石碑を建てた。今尙ほ五條の極樂寺墳墓には、その石

碑が建つてゐる。

かうして、亡父の十三回忌も修し、石碑も建立したので、先生は一安心をした。しかも再び江戸に下らうともせず、また五條に留まることもしなかつた。鳳雛の大翼を伸ばすにはおのづから他に廣い天地が在つた。節齋先生は漫然と故郷を出ていつた。

## 二、文名大に揚る

天保七年秋漸く深みゆく頃、慈母千代女の發病の報告を、節齋先生は備中長尾の移山亭で手にした。移山亭は山陽が曾て十數回も宿泊したところで、そのよしみにより、節齋先生は、當時その家に寄寓して、家庭教師のやうなことをしてゐた。移山亭の主は蘇園といひ、繪が上手であつたので、節齋先生も閑のある時には、繪筆を弄したらしい。後年山水や戯畫をよく描いたが恐らくその時の素養であらう。

節齋先生は、母の發病を知ると共に急いで五條へ歸省し、他の兄弟と共に親しく看護はしたものの、年來の勞苦は終に回復を見ずして翌天保八年四月十二日、五十八歳を一期として散つた。

疾くゆきて家の風をも起せよと言ひしは永のわかれなりけり

先生の歌である。浪々の身として、未だ一家もなさず、居を定めぬ節齋先生のこと、母の氣がよりであつた。「私には構はず、疾く行つて、あなたの學問の家風を起しなさい」さう言はれたことが遂に永遠の別離になつたといふ述懐である。

天下に浪々の身となつてゐても、今までは故郷には慈母が健在であつた。幾重の雲を距て、山河が遮つても、想ひは常に母の上にあつた。節齋先生の發憤の起源もそこに在つた。それが今、最早や再び健在なる母の面影には接し得られなくなつた。心中さすがに寂寞たるものがあつた。彼は三省した。

「俺は母に言はれた通り日本一の儒者を目ざして學問をして來た。しかしそれは一體

何を意味するのか、學問をして一學徒として終身を學に任すことだけでは、俺の心は何やら物足りない物を感じる」

苦悶は幾日となく續いた。しかも妙に忘れかねる言葉は、

「大義明分、國體の尊重すべきことを決して忘れるな」

といふ猪飼敬所の言葉と、常に舌端にほとばしつた山陽の尊皇思想の言葉であつた。年少にうけたこの感化は拭はうにも拭へぬものがあつた。

「學問はした。しかし俺の心の態度、身の修まりが、ほんとうには出來てゐるか」

かう我が心を喝破すると共に、先生は飄然として故郷を立ち去ることにした。そして、當時四國聖人とまで稱せられてゐた伊豫の近藤篤山こんとうとくざんを訪ねて行くことにした。

篤山の許では、儒教の學問は習はなかつた。しかし人間たるべき道に進む心を教へられ、また、人の師表に立つべき態度を教へられた。平易に言へば、實に指導者たるべき者の態度や、心構へを身を以て教へられ鍊成したのである。しかもその修學の年

は三年間に亙つてであつた。

天保十一年秋、先生三十歳の時、居所西條を引上げ、その途上、琴平在の俠儒日柳燕石を見出し、

「我初めて友を得たり」

と言つてゐる。言ふまでもなく燕石は明治維新の際、大に勤皇方として暗躍し、高杉晋作など一時彼のために保護せられたのである。節齋先生と對顔した時は、年齒僅に二十四歳、既に放膽な相があらはれてゐた。

四國を辭した節齋先生は、備中上成村の小野晚翠亭の許で、枕流社といふ塾を開いて、初めて青年の教育に當ることになつた。

時に天下の形勢はどうであつたらうか。江戸期の糜爛した文化が漸く陰影をかざし、徳川幕府の政權もやがて崩れようとする天保の末期であつた。頼山陽は日本外史を著はし南朝の正しきを論じて、國體の明徴を夙に叫んでゐた。山陽の思想に感化されて

ゐた節齋先生は、漸く天下に向つて目を向けることになつた。備中の片田舎に於て子弟を教へてゐるだけでは天下の形勢がわからない。やがて意を決して京都に出ようとした。

弘化元年先生三十四歳の時、京都に出て初めて自分の家の門口に森田謙藏の名札を出した、但し之が初めてであると同時に、その後は再び天下を浪々としたのである。即ち天下を以て家となし、身は國家に捧げて志は皇室の尊崇に置いたのである。その時まで用ゐてゐた「五城」といふ號をやめ「節齋」といふ號に代へた。

「萬事物を節することだ」

それが目標であり、指導者としての心構へも俾ばれるのである。

當時恰も頼山陽の子弟であつた江木鰐水が「山陽行狀記」を著はし、浪華の老儒篠崎小竹が「山陽遺稿」の序文を書いたが、節齋先生それを讀むとあまりに山陽に關して輕々しい筆使ひをしてあることを知つて大に憤慨、山陽の心狀のあまりに知らなさ

二二  
すぎることに對して鋭い矢を向けたのである。この論述が、大に天下に知られ、茲に於て大文章家森田節齋先生の在ることが、京都といはず浪華、江戸にまでも知れ渡つたのである。従つて文章を學ぼうとする青年、更に先生の氣節を慕つて教を乞ふ者が一時に多くなつた。節齋先生は、さうして集つて來た青年達に向つて必しも文章のみを教へたのではない。彼はもつと地に即したことを教へたのである。學ぶこと即ち實踐であるとの意義を明かに説いたに違ひがない。

だが先生は尙ほ若かつた。ここに第二の煩悶が起つた。それは「人間の踏むべき正しき道は何か」といふ疑問であつた。

「孟子正文を讀むこと數百遍、それ故七篇に於て一字を脱せず能く口に上る。唯その文の妙を見て、道の精微に於ては則ち未だ也。嗚呼僅年三十六、洛陽の少年稍々文名を得る許りにて、道義に於て定見なく、痛哭流涕病をなすなり」

その頃の書簡の一端にかうした文句がある。先生は、遂に塾を閉ぢ、單身「しんいんくら」西岩倉の

金藏寺に籠り、しばらくは世俗を離れて讀書三昧の境に身をおき、修養に怠らなかつた。

### 三、節齋先生と吉田松陰

弘化四年の三月僧院金藏寺の庭の山櫻が、らんまんと花を飾つた。

その院主と節齋先生は、靜な朝番茶をすゝりながら端居してゐた。

「先生、花は今盛りでございますな」

と僧が話しかける。

「みごとちやなあ」

節齋先生の答である。

「櫻は日本の國華、まことに風情がございますね」

「散り際が潔いからな」

「左様でございます。人間も散り際が大切でございますな。それは必しも死生の間際ばかりでもなく、何事も思ひ開きが肝心かと心得ます。一つの問題にくよくよとしてゐるなどは大丈夫のとらざる所と思ひますが如何でせう」

「うむ、一つの問題にくよくよしてゐることは大丈夫の執らざるところ！」

軽い問答の間に、かうした僧の言葉に出遇つた時、節齋先生は、思はず膝を叩いた。それは天來の啓示のやうに閃めいた。

「全くちや、何事も思ひ開きが大切ぢや、櫻のやうに散り際を深くすることだ。いや有難々々、わしはこれから鳥渡五條へ歸つて来る」

呆氣にとられた院主をあとしして、早くも旅装に變へた節齋先生であつた。

五條への歸途、先生は大和八木の豐儒谷三山を訪ね、三日二晩の筆談を試みてゐる。谷三山は幼少の時耳を病つて全くの聾者、しかも獨學して百説に通じ、學問は廣く高

潔の儒者として、敬所とも心を許した間柄であり、かたゞ、節齋先生も同國の先輩として常に兄事してゐたのである。殊に山陽は既に逝き、敬所亦老ひたる當時、節齋先生の最もたよりに思ふ儒者は三山であつた。

その筆談は今日まで遺り節齋先生の研究の好資料の一つである。

五條を訪れ、亡き父母の展墓をなし再び京都え上つて來た時の節齋先生は、最早や金藏寺の僧院にかくれてゐた彼ではなかつた。

天下の情勢日々に騷擾たらんとして、彼の周圍には頼三樹三郎、梅田雲濱等熱血の士が相寄つて來た。そして彼の居所は最早や天下に散在するやうになつた。

「萬里を行く」全く今日浪華にあると思へば明日は郡山、今、京に在ると思つたのに、早や五條に身を置いてゐるといふ風に、その存在を突きとめることが困難であつた。しかもその足迹には必ず國體明徴を吹き込まれ、尊皇の思想に深く歸依した青年の群があり、國論を高揚する文章が遺されて行つた。實行派の姿である。

その頃である。

節齋先生は深く思ふ處があり、彼の愛弟子乾十郎を五條の奥、十津川郷に入らしめ、説いて農兵を作らしめた。それは、十津川郷は往古より忠誠なる郷民で、たゞ天朝を戴くことを知つて他を顧ざる、剛健の氣象の傳はつて來てゐる土地であつた。

「一朝事あらば鳳輦をお迎へする」

さういふ節齋先生の決意のもとに、劃策された運動である。即ち後年天誅組の義舉が五條に發し、惜しくも敗れた時に據つたのは實に十津川郷であつた。しかも、愛弟子乾十郎も亦その烈士の一人として天誅組に加はつてゐたのである。

それ故、早くも節齋先生の周圍では青年の志士烈士が渦を巻きはじめ、隠然その統率者でなくとも、指導者になつてゐた。上記の梅田雲濱、頼三樹三郎等とも氣脈を通じ、松本奎堂も先生を訪ねて來た。否吉田松陰が先生を訪ねて師表と仰いだのも當時のことである。

恰も伊勢の齋藤拙堂が「海外異傳」なる著述をなした時、節齋先生は、その記事中不穩當と思ひ附に落ちかねることを指摘し、拙堂に再考を促すために文章を書いている頃であつた。

淺春夜來の雨をついて、一人の青年が五條に先生を訪ねて來た。逢つてみると齡の頃二十四五歳、やゝ神経質にして眼尻の上つた俊敏なる面構をした青年である。吉田寅次郎といひ長州萩藩の者だといふ、温容ながらどことなく冒し難い物をもつてゐた。即ち吉田松陰と節齋先生の初對面である。

二人は夜を徹して物語つた。節齋先生は磊落そのまゝ、竹を割つた如き性格で、狼と仇名された程に談に熱が加はると怒號するといふ鹽梅であつた。松陰はそれに反して表面柔和なれど、内には炳乎として犯し難い強靱さを持つてゐた。二人は初めの内は、文章のことに就て物語り、松陰はさすがに節齋先生の前には頭が上らず、一時は自分も文章家に成らうかと思ふほどの感化を與へられた。談一度尊皇のことに觸れる



と二人の顔は熱し血は湧いて胸底に相通する處があつた。

「人情反覆す雨か雲か」

氣は吾樓に似る獨君在り、

他日忘る勿れ河内の路

輿中輿外共に文を論す」

之は岸和田に向つて旅をする途中、節齋先生が松陰に示した詩である。詩中の吾樓とは節齋先生の子弟であり、松陰の親友であつた江幡五郎を指してゐるのである。駕籠の内には節齋先生あり、之に従つて歩いてゐる松陰の佛が目に見えるやうである。松陰は數ヶ月滞在して五條の節齋先生の許にあつたが、豫て江戸へ下るために出發することゝなつた。その時、節齋先生は齋藤拙堂に與へる文章を松陰に托して、拙堂に届けしめてゐる。

松陰の江戸へ入つた頃は丁度五月も末で、五月雨のしとくと降る中であつた。

その六月には米國ペリーが軍艦四隻を率いて浦賀に入港し、我國との開港を促してゐた。従つて國內に於ても開國と攘夷との議論が盛んで、相對立して譲らなかつた。節齋先生も國情日に相迫ることを身に感じ、最早や五條にのみ引籠つてゐられなくなり再び京都へ出て行つた。

その翌年、松陰は決死の志を抱いて、米艦乗込を目論んだ時、再び京都に於て節齋先生に相逢ふことが出来た。そして先生は袖を引止めて松陰の輕舉を翻さうとした。

嘉永六年三月、ペリーは幕府との約束により再び來航し通商を乞ふた。松陰はその機會をつかまうとしたが果たさず、却つて國法をみだす者として萩藩に送還され野山の獄につながられる身となつた。

「寥々たる門下久しく聞く無し」

誰か妖を掃つて偉勳を立つ

獨於菟あり膽斗の如し

單身踏まんと欲す五洲の雲

於菟は虎のこと即ち寅次郎吉田松陰を意味する。節齋先生が松陰に就て詠じた詩である。

松陰が節齋先生を師とした期間はさう長い間ではない。けれども、達人は達人の心を見ること容易である。先生は松陰の膽玉の大きさを讃える一方、松陰は先生を目して、文章に於ては天下第一、そして慷慨家であるが策が疎豪であると言つてゐる。それは確に節齋先生の一面であつた。先生は劃策の人ではない。又必しも策を弄する必要も無いのだ。一篇の詩よく青年を動かし、青年の士氣を高め得るのである。節齋先生の意氣はそこにあつた。それが勤皇派の資行家の眞面目である。それにしても松陰が節齋先生より感化をうけた一つの事實として、松下村塾の塾生達の素讀の癖が、どうも萩藩從來の讀み節と違つてゐる所があつた。これは師の松陰が五條に滞在中節齋先生から素讀を授けられた時の、讀み節の感化であつたのである。それはまた節齋先

生年少時山陽に就て文を學ぶ時にうけた感化でもあつた。

#### 四、無 絃 女 史

「詩文は我が妻にして、酒は我が妾か」と嘯いてゐた節齋先生は四十四歳まで婦人を近づけたことはなかつた。

ところが、當時浪華に住んでゐた先生の友人藤澤東咳の家を訪れた時、かねてから醜婦にして且つ學問のよく出来る學婢の居ることを耳にしてゐた節齋先生は、東咳に向つて、尙その婢の居るか否やを訊ねた。

「その女なら、まだ家にゐるが、それがどうした」

「まだ嫁せずしてゐるならば俺が女房に貫はうと思ふのだ」

「何？ 女房にするといふのか、もし貰つてくれるならば俺は往來に出て三遍地に手

をついて君にお叩頭をするよ」

東咳はその女の醜婦なることで初めの内は話を冗談にしてゐたが、先生は至極眞面目で、

「それでは之を彼女に渡してみてくれ」

と立ち處に左の詩を賦した。

「卅歳文に耽り文益々奇なり

苦心唯咳翁の知るあるのみ

言を寄す門下の孟光女

何ぞ吾儂を除いて誰に嫁かんと欲す」

詩中孟光女とは梁の伯鸞の妻で學者であつたが、誠に醜婦でもあつた。即ちここでは東咳の學婢を指したものである。

東咳はその詩を持つていそ／＼と室を出て行き、學婢に示した。學婢も忽ち次の詩

を作つて返して來た。

「海内の文章今誰に屬すか

詞場盡く節翁の奇を稱す

先生若し箕箒を執るを許せば

半ば良人と作し半ば師と作さん」

言ふまでもなく結婚許諾の詩である。東咳はいよ／＼往來に出て地上に手をつき三度お叩頭をしなければならぬ、お目出度い場面に立ち至つたわけである。

學婢は無絃と號し、時に二十八歳、本名小倉琴といつた。幼少の時天然痘を病ひ、ために顔面に痘痕があり、醜い顔の持主であつたといふ。しかし女としては四書五經に通じ、學問の上ではその右に出る婦人が居ない位であつた。

先生との間に一男一女を生んだが、女は夭折し、男は司馬太郎といつた。

ある時節齋先生の門下生の一人が、不都合があつたので破門されたことがある。後

有力な人たちから前非を悔ひ罪を改めるからとの申出があつた時、節齋先生は、大きな氣持でその青年を許容しようとした。しかし無絃女史は

「あのやうな者を再び塾に入れると、塾の氣風が悪くなるから」

との主張で、先生の説に反對した。そこで先生は笑ひながら

「鶏の牝が晨に時を告げるやうになつては、萬事終りぢや」

と言つたものだから

「それならば、私はお暇をいただきます」

さう言つて出て行つて歸らざること久しい間であつた。氣象はそれほど強かつたらしい。節齋先生晩年龍門村に潜居してゐる頃も尙は無絃女史はその側近には居なかつた。だが、その事實を知つて春日潜庵かすがせんあんが仲に入り、元の鞘に納めはしたものの、それから數ヶ月の後には、最早や先生は永遠の眠についてゐたのである。

無絃女史は節齋先生の亡きあと、那賀郡安樂川あらかはの莊に滞在して、そこで儒學を教授

し多くの子弟があつた。その門人に教授する際でも、自分は井戸端に在つて洗濯をしながら、門人の素讀を聴き、誤れる所を指摘して正したとまで言はれてゐる。仲々の學者であつたらしい。

## 五、倉敷時代

その後節齋先生は播州姫路——酒井家の所領であり、幕府の出張所のごとき感ある城下に於て尊皇を説き、或は備後藤江村の海岸に身を潜めてゐたが、時勢の風波が高まるにつけ、先生をいつまでも片田舎に置くことはしなかつた。それは求めて表面に出て來たのでなくして、大きな波に揺り上げられた形である。

備中倉敷の町は、中國筋の樞軸の地である。西するも東するも、人は皆ここを通過する。幕府は天領としてこの町に代官を置いてあつた。節齋先生はその幕府の屯所に

向つて堂々と乗込んで行つた。その時出迎へた門人の一人などは騎馬で先登に立つたと言はれてゐる位である。

當時の時勢は既に海外から米艦を初め英、露おの／＼表面は交易だとか、通商だとか言ふものゝ、それは一つの名目に過ぎず、内面は我國を機會あらば侵略せんとする野望に充ちた者ばかりが近づいて來てゐた。しかも幕府には、その蟲のいい要求を跳ね返すだけの氣魄もなく、また實際にその力もなくなつてゐた。それなればこそ井伊大老は專斷を以て、開港を許すことにした。しかし天下志ある者は、この事實を晏如として受け入れなかつた。節齋先生も、既に外夷の來ることを知り、その外夷に對しては國民が全體として打突<sup>ぶつ</sup>からねばならぬ。それには國民の意志なり思想がもつと強力なものにならねばならぬ。國論を統一せねばならぬと考へてゐた。然るに徳川三百年の施政の下に、骨抜きになつてしまつた諸侯や大名達は、皇室の尊嚴を顧みず、國體の明徴に影をかざし、徒らに自分の身邊を振り返へるばかりで、何等積極的な行動

に出ようとはしない。僅に水戸藩主徳川齊昭位が硬論を吐くに過ぎない。この意氣地なきに悲憤して節齋先生の情熱は高まらざるを得なかつた。即ち國論を統一する上に邪魔になるのは幕府の存在である。幕府を倒して、國民の眼から大きな梁を取り除き、そして天日に耀く皇室の有難たさと尊さを國民に知らさねばならぬ。節齋先生の意志はそこにあつた。

● しかも幕府の方では、誠忠無比なるべき青年達を捕へ、之を獄につなぎ、苟しくも幕府に害あると睨まれたる曉には用捨なく彈壓を加へるといふ有様であつた。橋本左内<sup>ひしもとさ</sup>、梅田雲濱、頼三樹三郎、吉田松陰等はその尊い犠牲として命を失つた。しかも結果はどうだつたらう？ 決して舊體制は維持されなかつた。この安政の大獄に對して悲憤を抱いた志士たちは、尊い犠牲者の靈を慰めずにはゐられなかつた。萬延元年三月三日、雪が夜來霏々として降りつゞいてゐた。その雪を蹴つて立つた水戸の烈士たちは、井伊大老を櫻田門外に於て倒した。

節齋先生に句がある。

三八

「元祿は夜櫻田はひるの雪」

之は言ふまでもなく、元祿の仇討ちは夜の雪中にあり、櫻田の仇討ちは日中の雪であることを諷したのである。

崩れかゝつた様相は、さへる術がない。勢ひの赴くまゝ水は流れてゆく、幕府では井伊大老倒れても、尙ほその政策を踏襲し、皇妹和宮の御降下を劃策し、公武合體により幾分朝廷の御意向を和げ奉らんとした形であつたが、結果はますます暗い路を辿らねばならなかつた。即ちその時まで攘夷の聲を高く揚げてゐた者たちは、寧ろ攘夷よりも倒幕といふ意向に傾いて來た。之は節齋先生既に天下に教へてゐたことである。

その討幕の實彈の第一發が天誅組の義舉である。

その時まで京都の意向は攘夷論であつた。そして速かに外夷を除くべしとの勅が幕

府に下つてゐたのである。それにも拘らず、幕府の因循は之を決行することが出来なかつた。ここに於て、天朝の御親征を仰ぐ外なしとして、先づその御祈願のため畝傍山陵へと行幸遊ばさるゝことに廟議一決したのが文久三年八月、その十三日にはいよく御發輦といふことに決つた、その先發隊として、年齒十九歳の中山忠光卿を頭とした、吉村寅太郎、藤本鐵石等の天誅組が大和五條の代官を襲ひ、その首級を擧げて、義兵の門途を祝したのである。然るに、大和行幸の議は突如として御取り止めになられ、幕府のゲリラ戦効を奏して、討幕を劃策してゐた三條實美以下七名の公卿は長州に脱走する破目に陥つたのである。従つて天誅組の烈士達は、後援を斷たれる形となり、遂に義舉は成功しなかつたものゝ、この烽火は遂に明治維新の大業を來らせる、討幕の最初のものであつた。

天誅組の擧發せられ、攘夷派の志士たち、續いて江戸幕府に迫らんとするに當り、その志士たちが、最も關心を持ったのは節齋先生のことであつた。常に口には尊皇を

三九

説き、討幕の實行を期し、その行動を示唆してゐる以上、さうした義兵を擧ぐるに當つては必ずや陣頭に立つて指揮してくれるだらうし、少くも義擧に馳せ付けてくれることと信じてゐたのである。然るに、身は倉敷に在つて、京都の動靜には風馬牛の如き態度を執つてゐるのは、まことに平素の持論に反することであり、卑怯な行爲であるなどと浪士たちの内には非難をする者があつた。

「我らの門途の血祭に、さういふ卑怯者を先づ刃にかけようではないか」などと激昂した連中もあつた。

けれども節齋先生は泰然として倉敷の町を出なかつた。先生には先生の考があつたのである。即ち當時中川宮殿下に奉る書を物して、その心狀を天下にあらはした。

「謹んで申す。益(先生の名)ひそかに謂ふに、古より天下非常の變あらば、必ず非常の英傑ありて、之を濟すふ……」  
といふ冒頭の有名なる名文である。

節齋先生思ふに、天誅組に飛び込んでいつて第一線に身をさらす勇氣がないのではない。しかし忠節をつくすのは必しも槍劍を執つて戦場に馳驅するのみではなく、一管の筆を執つても亦、誠忠の實を作すことが出来る。自分が若し第一線に於て命を堵した場合、次ぎへと第一線に働く志士の養成に當る者がどこにゐるか。自分に與へられた天命は必しも長槍を揮つて戦線に勇躍することではない。寧ろさうした誠忠の將士のあとを弔ひ、彼等の勇躍史を書き、後世にのこすことが自分の務である。即ち

「刀劍獨り國に殉するの具に非ず、文筆も亦國に殉するの具なり。因つて考ふるに方今の務は大義を明かにし、名分を正し、士氣を振興さすに在り」と上書中に書いてゐる。

それがため、先生を一時非難した者らも、先生の意のある所を察し、寧ろ之が檄文として利用せられ多くの志士の血を沸かしめたのである。

天誅組について、長州の勢を京都から遠ざけ得た幕府は、その機會に長州を叩き、幕府への反抗の根を断たうとして、所謂長州征伐の軍を擧げることになった。節齋先生は、之を知つて、著名なる「犬之説」の文を作つてゐる。

「之を獵夫に聞く。田かりごとに群犬途に在つて相闘ふ。人山に入るに及んで、同心戮力、大に禽獸を獲といふ。方今の諸侯途に在る群犬となり、而して山に入るの群犬と爲る能はず。悲しいかな」(原文漢文)

之は幕府の命をうけた諸侯が途上にある群犬となりお互に相闘ふが、一旦山に入つては群犬にも劣るだらう。哀れなものだといふ意味で、長州征伐に向ふ諸侯を罵倒したものである。それ故、幕府としては、その長州へ向ふ往還の倉敷あたりに居を構へて、勤皇思想を鼓吹してゐる節齋先生のゐることが邪魔でしようがなかつた。

遂に代官は塾生一人々々を呼び出し、その身元を調べ、それ／＼の藩へ歸らしめるやうな手段をとつて壓迫を加へ初めた。

それがため先生も止むなく塾を閉ち自らの身をも避けねばならなくなつた。

## 六、小楠公もくすのぶ警塚けいづか碑文

倉敷の町を引き拂つた節齋先生は、故郷五條へ戻つて來た。當時は心身ともに稍疲勞してゐたのは事實である。それに、幕府がいくら無理な蠢動をしようとも、最早や天下の形勢は解つてゐた。一時は朝廷側の長州勢を斥け得ようとも朝廷側は獨り長州藩のみではない。天下の人心がおのづから歸すべき處へ流れて行つてゐるのだ。もはや節齋が一人で青年たちを指導せずとも、天下の勢が彼等を連れて行く、さういふ風に先生は世の中のことを觀じはじめた。それでも、故郷五條に歸つてみれば尙ほ天誅組のほとぼりは消えず、先生を目するに白眼を以つて、冷然と取扱ふ様子があつた。代官所の壓迫はたえず身の周りに迫つてゐた。そこで五條の近くの榮山寺といふ寺に



引き籠つて詩文に身を埋めて幽居の日を送ることになった。

榮山寺は藤原武智磨の建立した古刹で、長慶天皇には御ゆかりのある壯麗な寺院である。現今はすっかり廢れて古色蒼然たるものがあるが、寺門は上市街道に面し、道を距て、吉野川の清流が淵をなしてたゞへてゐる。

ある日、旅装をした一人の男が先生を訪ねて來た。紀州那賀郡丸栖の住人山本弘太郎といふ。曾ての門下生であつた。久淵を叙したあとで弘太郎は、

「今日は一つ是非先生にお願ひがあつて參上しました」と切り出した。

「この節、わしに頼みとは何事だらう」

「外でもありません。實は私の藩に津田正臣といふ物頭役を勤めてゐる者が御座います。自分の家系は楠木氏の後裔といふことで、豫てより、後醍醐天皇の御陵下にある小楠公の鬘塚の建碑を思ひ立つて居つたので御座います。就ては、その碑文を是非先生に御願ひ致してくれとのこと、今日使者に立つて參上いたしましたわけで御座います」

「なるほど、小楠公鬘塚の建碑とは、近ごろ奇特定の至りぢや」

「御承諾いたゞけませうか」

「あゝ、他のことではない、楠木氏のことなら及ばすながらも作つて見よう」

かうして津田正臣、即ち紀州藩の大參事になつた津田出の弟で、津田の家を嗣いでゐた正臣、後、和歌山縣の縣令にもなつた者からの依頼であつた。紀州藩は言ふまでもなく三家の一、徳川家の親藩であるに拘らず、その徳川幕府から監視されてゐた節齋先生に、大忠臣の碑文の頼まれたことなど、皮肉な世の中である。

節齋先生は、それがため、多武峰に談山神社を拜し、次いで吉野に如意輪堂を拜み、親しく正行の鬘塚を訪ねた後、精根こめて文を作つた。

「正平三年車駕芳野に在り、賊將高師直、大舉來寇す。」（原文漢文）

この文句を以て書き起した「小楠公鬘塚碑文」は之亦節齋先生名文の一つと言はれるものである。

この名文も忽ちのうちに天下に流布せられ、尊皇思想を鼓吹する上に大きな役目をなした。遂にその碑文が天聽にも達したほどである。けれども一方幕府方としては、誠に有難くない宣傳で、何かにつけて先生が邪魔でならなかつた。それかと言つて當時は最早や門人に教へるでもなく、まして陣頭に立つて指揮する先生でもないの、幕府としても直接手を下すわけには行かず、只事あることに間接ながら壓迫を加へ、監視の眼を深くするばかりであつた。

かうして榮山寺の幽居も、決して先生の心を安らかにせしめなかつた。

### 七、龍門山麓を墳墓の地とす

榮山寺を去つた節齋先生は、紀州那賀郡龍門村荒見の里、北長左右衛門忠鶴の家に匿まはれる身になつた。

それについては、同郡名手の在の名醫林南溪の斡旋があつたからである。南溪と節齋先生の亡父文庵とは曾て京都に於て知り合になつてゐたのかも知れない、同時にその頃としての南溪は外科の華岡隨賢と共に紀州出身の名醫として天下に聞えてゐたので、節齋先生の弟菊三郎仁庵は年少の時から、この南溪に學んだよしみがあり、節齋先生も一二度は名手を訪問したこともあつた。そんなことから、既に心身の弱くなつた節齋先生の閑居を心にかけてゐたのが、幸にも南溪の縁者に當る北家を擇んだのである。

北家は鎌倉時代から荒見に居を構えた豪家で、曾ては所領として東は麻生津、西は安樂川に及び龍門山麓に隱然勢を張つてゐた家柄である。中世から代々醫を業としてゐたものゝ、一方に於ては大百姓でもあつた。忠鶴の性情は誠に豪放で、また村のためにもよく盡力し、今日果實村として和歌山縣下に屈指の龍門村となつてゐるのも、基礎は忠鶴の意圖にあつたことが物語られてゐる。彼は龍門村の土地が龍門山麓にあ

り、多く傾斜面であることを思ひ、まづ道路灌漑の便を圖り、柑橘を植えることを奨勵した。恰もその土地は地下水に近く、果樹栽培には好適地でもあつたのである。

慶應三年暮十二月、節齋先生は一子司馬太郎を伴うて、五條を出立、陸路橋本驛まで来て、そこから舟に乗つて紀の川を下つた。途中藤崎の勝景に接して「古岳庵記」を作り無事荒見の里に着いた。

北忠鶴は、快く節齋先生を迎えた。節齋先生も亦、北家に入つて初めて心の落着きを得たやうに思へた。その居は南窓を開けば龍門山の微翠は眉に迫り、北窓に倚れば紀の川の清流を見下せる位置にあつた。豪放と磊落の二人の持主はお互に心に通ずる物があつた。そこへは志を抱いた青年達も、もう追ひかけては來なかつた。先生は大の字になつて毎日身を横にすることが出来た。「節齋先生讀書之處」などと扁額を書いてほゝゑんでゐた。この山麓に潜居してゐるとはいへ、決して逃げ隠れをしてゐるのではないから、大聲で物を言ひ、大聲で笑ひもした。若し幕府が引つばつて行くなら

連れてゆくがよい。そういふ氣でもあつた。

「勢誅せらるに過ぎず」

すべては運命の勢が趣くまゝである。誅せらるゝ時は誅せらるゝ許りだ。これが先生の信念であつた。

北家に寄寓しつゝ、興にのつては大字を揮ひ、詩や文を書いた。時には粉河の町まで出かけて、好きな酒を振舞はれる家があつた。本駒屋、南駒屋などと仲よくなつたのも酒のおかげである。

當時、至尊に置かせられては、畏れ多くも身を以て國難に當らんことを期し給ひ、寒風肌を劈く日、宮廷の中庭に御し、寒、夜御厭もあらせられず、水垢離を取らせ給ひ、天地神明に祈らせ給うたのである。

澄まし得ぬ水はわが身を沈むとも濁しはせじな四方の民草

この御製を拜して誰かその叡慮のほどに感泣せざる者があるか。七日間の御祈願、

遂に舊十二月五日にはいさゝかの御風氣で御熱が充ぜられたのである。その月の末には遂に崩御遊ばされたのである。寶算三十六、萬民哀慟、涙の中に年が暮れた。

しかし内外の多事は、いつまでも哀悼に咽んでゐることを許さなかつた。新帝明治天皇の御踐祚により世は將に曉天を望む氣持になつた。

「皇統綿々として幾萬春

方今ますく胡塵を汚さんと欲す

此の時幸に出ず聖天子

乾坤を一變して日月新なり」

節齋先生の詩である。

幕府でも亦家茂死し、水戸の齊昭の子慶喜が將軍の位に上つてゐた。土佐藩の後藤象次郎等の言を容れて、慶喜は遂に大政奉還の舉に出たのである。

あめつちのひつくりかへつておめでたい、二度の天子と夜は明けにけり

之は節齋先生の狂歌である。

この間日月にしては短いながら、江戸薩藩邸の襲撃があり、鳥羽伏見の戦あり、征東の錦旗進まれました。しかし過ぎてしまへば歸する所を一にした日本人同志である。馬上で政權を執つた將軍も、聖天子の下では一臣民である。

慶應四年三月十四日、遂に王政復古が實現せられ、五箇條の御誓約を群臣に御示しにられたのである。

その三月の末、新たに奈良縣令になつて赴任して來た節齋先生の舊知春日潜庵の肝煎でその時まで森田家を離れてゐた無絃女史が節齋先生の許に還ることになり、親子水入らずの生活が、北家から數丁更に龍門山の斜面を登つた所にある、神宮寺に於て營むことになつた。しかしそれもほんの數ヶ月の間に過ぎず、その年の七月二十六日には

「あゝよかつたく天子さまの御代となられたのだ」とつぶやきながら、最早や力盡

きた人となつて靜に永遠の眠に就いた。

明治四十一年十一月十二日特旨を以つて従四位を贈られ、勤皇儒者の光榮更に光を添へたのである。

節齋先生の寄寓してゐた北家は今尙ほ現存し、遺墨の數々も遺つてゐる。更に神宮寺の閑居もそのまゝ遺され、墓碑は北家の墓地の内、木立小暗い中に無絃女史及司馬太郎の墓と共に列んでゐる。

私共はこの大きな勤皇志士の指導者であつた儒者森田節齋先生の史蹟が我が縣下にあることを思ひ、今一度先生のことを偲ばねばならぬと思ふ。

昭和十八年十二月二十日初版印刷  
昭和十八年十二月二十五日初版發行

森田節齋

定價金 參拾八錢

特別行爲稅 金 貳 錢

相當額

合計金 四拾錢

和歌山縣廳内

大政翼賛會和歌山縣支部

代表 坪野賢三

和歌山市雜賀屋町東ノ丁三

若林健治郎

和歌山市毛革屋町二

吉川雅三

印刷所

發行者

編著者

發賣所

和歌山市雜賀屋町東ノ丁三

若林撰書堂

電話三三三二一  
番  
振替大阪四一二〇二番

終



賣價 40